

私の考えるコーチング論：選手を導く・個性を引き出す

大嶽 真人¹⁾

「コーチング」という言葉はいまやスポーツ界にとどまらず、ビジネス界や教育界など、多くの分野で使われている。それぞれの分野でいろいろな表現がされているが、共通していえることは「コーチング」の有益性が注目され、あらゆる組織が、自分で考え、行動できる人材を育成することに力を入れているということである。

サッカー界においても、育成の強化が始まって久しい。以前の勝利至上主義や詰め込み型の指導から、選手の自主性や想像性を育てながら一貫したコンセプトの中で、発育発達をふまえた指導が重視されるようになった。育成年代で選手に何を教え身に付けさせることが必要となるのか。自分で考え、行動できる選手とはどのような選手なのか。指導者はサッカーを教えることはもちろん、サッカーで何を教えるべきなのか。

これまで私が見たこと、聴いたこと、経験したこと、指導したことに基づいて私見を述べたいと考える。これは、サッカーに携わる指導者だけでなく、指導者としてスポーツに携わる多くの方に指導観や携わる競技について見つめ直し、未来ある子どもたちのためになることを期待したい。

1. サッカー先進国の取り組み

サッカー先進国・強豪国といわれるドイツは、2000年頃の低迷期を境に世界のトップレベルに追いつく、もしくはトップレベルを維持するため、タレント・エリートの育成の強化を開始した。そして、わずか数年後、2008年にはU-19ドイツ代表がU-19ヨーロッパ選手権で優勝するという快挙を成し遂げた。この成果は育成の重要性を再確認することとなった。このように、育成とは今日ではなく、未来への取り組みであるといえる。現に、ドイツ代表選手は2000年に比べ若い選手が増えており（2010年ワールドカップ南アフリカ大会では23歳以下が9名エントリーされていた）、これは、7年間の取り組みでトップレベルの選手を輩出することができているという証である。2010年ワールドカップ南アフリカ大会で活躍したメスト・エジルやトーマス・ミュラーは、この育成改革の頃にユースとして活動していた選手である。では、ドイツは7年間の間に何を行なったのか。

その取り組みは大きくは3つの柱からなる。

1) タレント育成のプログラムと拠点をつくる

2) 各ブンデスリーガのプログラムに育成センター、ユースセンターの設置を義務付ける

3) ユースの代表チームの取り組み

以上の3つを柱にして、細かく組織化され取り組みが行われた。その成果が、低迷していたドイツを7年後のU-19ヨーロッパ選手権優勝に導いたといえる。

ドイツは選手の将来に向けて、長期的な視野でフィジカルや精神力だけが強いというドイツサッカーからボールを扱う技術力も兼ね備えた選手の育成を目的としている。また、ドイツでは日本という体育の授業は学校教育の中では行われず、子どもたちは地域のスポーツクラブなどで行うシステムになっているため、10歳以下の子どもたちにはサッカーだけでなくさまざまなスポーツや遊びを行い、運動能力や運動経験の向上を図る取り組みが現在行われている。そして、ドイツはもう一つの重要なポイントとして、指導者養成を掲げている。将来を変えることができるのは、育成年代の指導者だけであり、彼らの「質」が高まらない限り将来はないという考えに基づいて、指導者のレベルアップを目的に新たな指導者養成の取り組みが行われている。

このようにトップレベルのドイツでは、さまざまな取り組みが導入されている。それを受けて、改めて日本の体制について考えることが重要ではないだろうか。

1) 日本大学
Nihon University

2. 育成年代の指導環境

近年のサッカー競技における育成年代の指導環境をみると、選手数の増減には大きな変化はみられない(表1)が、(財)日本サッカー協会が認定するJFA公認指導者ライセンスを保有している指導者数は増加している(表2)。このことは学校部活動やクラブチームにおけるライセンス保有者による指導が可能となった状況を示しており、チームによっては複数のライセンス保有者が指導にあたっている。

しかし、その一方で、中学校部活動では顧問の先生が校務に追われ部活動で十分な指導ができなかったり、配属校の移動によりサッカー部としての活動ができなかったりとさまざまな問題を抱えていることも事実である。また、地域クラブではチーム数が年々増加し、都市部などでは練習や試合で使用するグラウンドの確保などハード面での問題や、運営費などの問題からひとつのクラブが多数の選手を抱えてしまう現状もある。これらの問題を解決するためには、チームや選手数に見合った指導者数を設定することや育成理念および指導環境にあった選手数で活動することが重要である。さらに、学校部活動ではライセンス保有者が外部指導員として指導にあたり、学校教育と連携を図る必要がある。

これまでもさまざまな試みがなされてきたが、決して十分とは言えない現状である。同一組織からであっても試合に出場できるチームや子どもたちに目が行き届いているチームが増えることによって、子どもたちは練習で学び、試合で実践することになり、試合を通してサッカーを身に付けることができる。また、適正

人数で指導することで選手と向き合うことが可能となり、指導者の指導をする「場」も増え、育成年代に携わる選手や指導者にとって多くの経験をすることが可能となるであろう。

これらを踏まえ、指導者は指導者ライセンスを取得するだけでなく、取得した後にどこで、誰を対象に何を指導するのか、そしてどこへ導いていくのかという目的の基に実践しなければならない。そして、指導者自身が選手の特性を理解し、選手の個性を育てていくことが求められる。

3. 育成年代のコーチング

育成年代とは一般的に、身体的発育発達状況に基づき、プレゴールデンエイジ(5~8歳頃)、ゴールデンエイジ(8~12歳頃)、ポストゴールデンエイジ(13歳頃から)、インデペンデントエイジ(16歳頃から)とに段階的に分類される。(財)日本サッカー協会技術委員会では幼少期から18歳前後までを育成の全体像として捉え、2歳毎による指導ガイドライン(U-6・U-8・U-10)および指導指針(U-12・U-14・U-16)を示している。

サッカー先進国では18歳前後でプロ選手として契約できるかどうか判断されるが、日本では教育機関の部活動の存在が大きい。日本のトップに位置するJリーグでは各クラブが下部組織を保有することが義務付けられ、基本的にはクラブの特色はあるにしろ小学生年代から各カテゴリーを経てトップ選手を育てるシステムがある。しかし、現状ではひとつのクラブから各カテゴリーを経てトップ選手になっている選手はご

表1 JFA登録選手数

(単位:人)

年度	第1種	第2種	第3種	第4種	女子	シニア	合計
2008	175,947	153,047	236,514	282,154	25,071	16,555	889,288
2009	172,700	154,559	237,964	280,380	25,268	18,045	888,916
増減	-3,247	1512	1450	-1,774	197	1,490	-372
増減率	-1.8%	1.0%	0.6%	-0.6%	0.8%	9.0%	-0.04%

(日本サッカー協会HPより)

表2 JFA公認指導者ライセンス保有者数

(単位:人)

年度	S級	A級	B級	C級	D級	合計
2008	280	867	2,388	25,124	30,044	58,703
2009	302	928	2,648	25,717	31,696	61,291
増減	22	61	260	593	1,652	2,588
増減率	7.9%	7.0%	10.9%	2.4%	5.5%	4.4%

(日本サッカー協会HPより)

くわずかであり、Jクラブから教育機関を経たり、教育機関だけを経てトップ選手になったりとさまざまなルートがあり、これは日本独自の育成形態であるといえる。また、選手だけではなく指導者もプロ選手を経験した者からライセンスを保有している契約コーチが部活動を指導したり、教員を経験した者がJクラブの指導をしたりと指導する側も多様化している。こうした背景から考えても学校教育での育成と地域クラブ、Jクラブとがこれまで以上に交流を図り連携をしながら教育的指導、社会的指導、強化と育成を考慮することが何よりも重要ではないだろうか。そのためには「私が育てる」「私が見ている」ではなく、「みんなで育てる」「みんなで見ている」育成環境を整えることが重要となり、多くの指導者によって選手の可能性を引き出し、現在の状態より少しでも進歩させなければならない。

小学生年代の育成では、(財)日本サッカー協会は小学生大会においてピッチサイズを縮小し、11人制から8人制を導入した。これまでの体が大きい、足が速い、ドリブルがうまくボールを奪われない選手が活躍をして評価を得る試合から、サッカーの目的である相手からゴールを奪い、ゴールを守るという場面を増やす試合を目指し、試合そのものの意図するところが変化しているといえる。もちろん、今後もひとりの力によって試合が支配され、そのような選手が活躍することも予想される。また、選手を評価する際にスピードに代表される運動能力や身長が高いなどの身体的特徴が評価項目となることもある。しかし、実際には、選手の運動能力や身体的特徴の成長は未知数であることから、実戦的技術を獲得させることに努め、そして評価していかなければならない。それは、プレー状況の把握や理解度、選手が何を観てどのように発揮しているかということに対して指導者は眼を向けることこそが、本当に小学生を育成することとなる。

中学生年代の育成では、ゴールの大きさ、ピッチサイズ、ボールの大きさ等「大人のサッカー」の入門編と言える。小学生年代に身に付けた実戦的技術を味方と相手の状況に応じて使い分けること、さらに動きながら正確にプレーできることが求められる。そして、それらが攻撃として効果的であるようにしなければならない。また、技術面の指導とともにボールのないときの意図的な動きを戦術として組み合わせて指導する必要がある。サッカーの攻撃と守備が一瞬で入れ替わり、選手の縦と横の動きの関係やダッシュ、ジョギング、ウォーキング、ジャンプなど連続した動きがある

中で、自分が生きるプレーと味方を活かすプレーをする「大人のサッカー」への転換期になると言える。

この年代での指導は「教育的なサッカーの指導」も必要となる。そのため指導者は、サッカーのフィロソフィー、トレーニング理論、運動生理学、心理学、スポーツ医学などの知識がなければならない。この年代は身体的、精神的に成長期であるため、この時期に見合った体の動きを見極める能力、心の動きを読み取る能力が必要になってくる。今よりも上手く、今よりも解る、今よりも楽しくという気持ちでサッカーに関わり続けられる選手であるように伝えなければならない。選手は指導の受け取り方も成長する度合いも同じではない。選手を導くことができる良い指導者がいなければ良い選手も育たないといえる。しかし、選手の秘めている才能や可能性を見逃さず、トップレベルへ個性を方向づけることができる中学生年代を指導するスペシャリストが少ないことも事実である。

このように小学生年代では自分で体を動かすこと、スポーツを行うための基礎を獲得させることが重要となり、サッカーにおける実戦的な技術を学ぶことになる。中学生年代ではその競技の本質を追求し、専門的で実戦的な技術を状況に応じて使い分けること、判断を伴った状況で自ら考えてプレーできるように設定することが重要となる。そのためには、選手は目標設定を行い、指導者は育成目的を明確にする必要があるといえる。そして何よりも選手の能力を最大限に引き出すことが前提である。

高校生年代では、これまでに獲得してきた技術、引き出された個性や能力、自分らしさを活かす決断力と柔軟な対応、素早い修正ができる応用力が求められる。また、グループやチームにおけるポジションや戦術の理解、サッカーを知的に捉え、個人としてもチームの中の一人としても質の高いプレーでサッカーが展開できるようにしなければならない。しかし、高校生年代は進路、就職などを考える大きな起点となる時期でもある。このときに指導者がサッカーだけを求めるのではなく、サッカー以外の世界を見せること、考えさせること、感じさせることをしなければ、選手の進む道を狭めてしまう。指導者はオンザピッチとオフザピッチの両面から選手を育成していくことの重要性を再確認すべきである。しかし実際には、まだまだ選手も指導者もサッカーが中心の言動や行動がみられる。サッカーにおいて攻撃を行いながら守備の準備を行い、守備を行いながら攻撃の準備をするように、サッカーをする者としてサッカーと学業を両立することと

社会的行動を学ぶことは常に分けることなく追求することが重要である。

大学生になると、指導者は選手がこれまでに培い磨かれてきた個性や長所の質を高めながらサッカーのスペシャリストでありプロフェッショナルな姿勢を持たせなければならない。また、選手の組み合わせやポジション変更、組織の中の一人としての役割を与えるなど新たな一面も探り可能性を広げることも重要となる。選手には「教わる」「指導を受ける」という受動的ではなく、自己分析や自己認識などを行い主体的な行動をとれるよう行動の変化を求めなければならない。また、大学生はトップ選手としての能力に到達しない場合がある。だからこそ敢えて学ぶことを求め大学へ進学したり、サッカーを追求したり、指導者になりたいという意志のある選手の集団であることを考えると、サッカーそのものよりも社会に出る前の重要な教育機関として、高い水準で人間力と社会適応力を要求、育成することになるかもしれない。

このように、選手育成には選手の数だけ形があり、時間がかかる。選手の能力や環境などによって形成される資質も異なり、選手はさまざまなルートで成長していく。大学生という年代においては、プロサッカー選手を育てることとサッカーを通して社会で即戦力として活躍できる人材の育成にあたることになる。数年後に、サッカー選手や指導者、レフェリーとして、あるいはスポーツ行政やスポーツ産業、さらには民間企業からスポーツ環境を構築する一端を担う彼らの未来に期待して指導したいと考える。

4. コーチングの実践

指導者は子どもたちに何を獲得させなければならないのかを明確に示すことができなければならない。育成年代に獲得しなければならないものは、チームが勝つための戦術やシステム論、相手のストロングポイントを消すような作戦ではない。また、4年に1度のワールドカップで明らかになる世界のトレンドをまねるのではなく、世界のサッカーの流れを知り、世界基準で行われるプレーを支えている技術、戦術、動きと、それを行動に移す判断力を育成年代で獲得できるように働きかけることである。その働きかけとは、練習メニューやトレーニング方法によって選手を枠に入れるということではなく、実戦的技術や戦術を学ぶ中で選手の素質や能力を引き出せるようにコーチングをすることである。

技術獲得のトレーニングとってすぐに浮かぶ光景

は、守備者がいない状況での対面パス、三角形パス、四角形パスが挙げられ、ボールを受けるタイミングや視野の確保（体の向き、立ち位置）、コントロール時のボールを置く位置、パスコースやパススピードなどを指導者が要求して、繰り返すトレーニングである。その方法として「その場で止まってプレー」「動きながらプレー」「選手とボールの動きに角度と方向があるプレー」を課題設定として段階的に行われている。このようなトレーニングではパスする地点が定められていること、パスを受ける選手が守備組織の突破を考えていない状況下の選手にパスを選択すること、ゴールを目指す過程でのパスがイメージしにくいということが考えられる。

また、パスの目的を改めて確認しておく必要がある。パスの目的は、ただ単に味方に「つなぐ」「あずける」、敵がいらないところへ「まわす」というものではなく、「シュートをするために」「ゴールに向かうために」「相手を突破するために」ということが前提である。その状況に適したパス、次の選手がプレーできるパスとは何か、効果的なパスとは何か、選手が自発的に考え、実行しなければならない状況下でのトレーニングが重要であるといえる。もちろんトレーニングでボールをコントロールする足の部位、ボールに触れる位置や足を出すタイミング、力の入れ具合、立ち足となる膝の柔軟性などを何度も繰り返し感覚を掴ませることも大切なことである。

パスひとつをとっていても足の部位や軸足の位置によるボールの質（強さ、方向、転がり方、浮き方）がどうなるのか、ボールを蹴った時の音やボールに接触した感覚がどうなっているのか、ボールへのアプローチ方法など技術を選手自身の感覚として身につけることが目的とされる。同じ設定、状況を反復するトレーニングにも効果はあり、場面に特化して習得すること、同じことを繰り返して感覚を養うことが可能となる。多様性のある技術を状況に適した実戦的技術にするために、選手の動くスピードや走る角度、味方との距離が違う中でトレーニングを行う必要がある。また、パスとコントロールについては、自分だけのポイントにボールを止めたり、置いたりしてボールを蹴ることが求められ、一連の動作として切り離すことができない。このような技術の獲得には、相手がいらない状況で技術を習得し、感覚として捉えさせ、判断が伴う中で状況に適した技術として試合場面で実践できるように結び付けることが重要である。

サッカーは一瞬で状況が変化し動き続けている中

で、プレーを判断し柔軟に対応して技術を発揮しなければならない。そのため、トレーニングでは技術の獲得、戦術の獲得、判断力を養うものを区別するのではなく、同時に行いながらも選手に適切な内容と練習環境をオーガナイズすることが求められる。指導テーマを明確にしてグリットの大きさや形、オフェンスとディフェンスの人数や配置、ゴールの大きさや数と置く位置、セットされた状態から始める際のボールの配球、選手の組み合わせ、プレーの限定や規制などを使い分ける必要がある。さらに、プレーが実戦的であるためには、できるだけトレーニングにゴールを設定することが重要である。ゴールがあることで方向性が生まれ、選手はプレーの原則を学ぶことができる。どこにポジションをとるのか、どのようなプレーを優先させなければならないのか、どのように相手を崩すのか、そのためにはどのように動くのか、どのようなタイミングでパスを出すのか、どこでパスを受けるのかなどを考えることは試合に一番近い状況の中でトレーニングすることになる。指導者が意図的にトレーニングをオーガナイズすることは、選手のプレーを予測すること、課題の解決や獲得状況を把握することにつながる。

「伝える力」を身に付けた指導者へ

効果的に選手に指導する方法としてフリーズコーチングがある。練習場面において、プレーを止めて状況の再現を行いプレーの意図や効果を振り返りながらミスの修正やより効果的なプレーを考えさせる。これは、選手へ問いかけることで当人だけでなく他の選手もその状況を見たり聞いたりすることが可能となり、ともに考え理解を深め状況を共有することができる。そして、指導者がその場面におけるデモンストレーションを行い、選手に視覚的にも情報を与える。また、選手はその場面を再現して成功体験を行い、プレーを振り返る。フリーズコーチングは選手自らが考えることができ、プレーを再現することができることから「見る・聞く・行う」を同時にアプローチできる指導法として一般的には推奨されている。しかし、実際には指導者がその場面を見つけられなかったり、見逃したり、タイミングが合わなかったりとフリーズできないことがしばしばある。またフリーズが多くなるとプレーの流れが止まったりプレーする時間が少なくなったりすることについて注意しなければならない。

サッカーでは、常に状況が変化するように選手の判断や行動も変化する。その中で個人の状況に合わせて

コーチングするためには、フリーズコーチングに加えて個人に対しアプローチが可能となるシンクロコーチングを身に付ける必要がある。シンクロコーチングはボールのある、なしに関わらず、選手個人に向けて「周りを見ろ」「寄せろ」「パスを出せ」などの抽象的な指示や判断を奪い、プレーを考えさせない声かけではなく、選手がプレーを理解できる具体的な指示を出すこと、「ナイスプレー」「〇〇がいいぞ」など褒めること、また選手が動きながらプレーを修正したり、気付かせたり、注意を促したりと指導者がその選手だけに働きかける方法である。そのため、シンクロコーチングは選手のモチベーションを高く維持し瞬時にプレーについて成果を確認することができる。しかし、言葉かけされる選手だけがわかる感覚や状況についてのコーチングであるため、他の選手と共有することが困難であったり、選手が考えてプレーする前に指示を与えてしまうことがある。また、指導者はボールが関与している結果や状況に対してばかりに目が向いてしまい、指導のポイントをそこに置いてしまうことに注意しなければならない。サッカーでは攻守に渡りボールがない時間帯に動くことが圧倒的に多いため、ボールを扱っていない選手の動きの量や速さ、方向といった動きの質、ボールから遠いエリアでの動きについても把握する必要がある。指導者は、それらを見逃さないよう一点に集中せず俯瞰して全体を捉えることが重要となる。

オーガナイズやフリーズコーチング、シンクロコーチングなどは、実際にどの方法を用いるかは指導者が指導内容や獲得させたい技術・戦術によって使い分けなければならない。指導者の考えや意図することによってもトレーニングで表れる現象が変わり、選手が見る場面、経験する状況も変わってくる。指導者がデモンストレーションを行い見せる伝え方から状況や修正ポイントを瞬時に声をかける伝え方によっても選手が受け取る情報量や重要度は変わってくる。指導者は今伝えるべきことをどう伝えるかといった「伝える力」を身に付ける必要がある。指導者は選手に適した内容を伝えることによって、選手に刺激を与え、選手がどのように判断をするのか、どのようなプレーを発揮していくのか「楽しみに待つ」こと、そしてサッカーを伝えるためには指導者自身が選手以上にサッカーを多角的に捉え深く理解することが求められる。

5. 指導者の資質

指導者はサッカーだけの指導に偏ってはいけないと

いうことを育成年代では念頭に置かなければならない。例えば中学生年代であれば自立し、自律することができる選手を育てることは選手の将来において大変重要である。礼儀や挨拶、言葉づかいなど「躰」といわれる部分への指導は、サッカーの技術を教える以前の問題であるといっても過言ではない。指導者にこのような教育的配慮をなくしては育成について語ることはできない。これは選手の学力や成績を高めるということではない。サッカーのプレーを通して人間性を磨き、自主性を身に付けること、仲間や目上の人との人間関係を築くこと、そして自分がサッカーをできているのは家族や友達、学校の先生、指導者などがあって成り立っているということを理解し感謝することの大切さを伝えなければならない。これらは、サッカーの技術の向上とともに重要なことであり、指導者や教員といった「大人」が伝えていかなければならないことである。しかし実際には、試合会場や練習会場で「気持ち」がない形式的になっている挨拶や言動、行動が見られる。そして試合中における審判の判断に対する異論、不満なジェスチャー、さらに交通機関でのマナーなどについても指摘の声があがることもあり、人間育成といいながらも指導者の伝えている言葉や行動が、選手に反映していないのではないのか。また、伝えるべき「大人」が育成年代の選手に伝えていることに反し、そのような言動や行動をとっていることも考えられる。前述したように、指導者はオンザピッチでもオフザピッチでもその都度誰かに分担するのではなく、選手に気付き修正する指導が繰り返されなければならない。指導者は選手の可能性を見出し、自分には何ができて、どのようなことが優れているのか、自分の価値を認識して自信を持てるように導かなければならない。同じような人間を育てることには何の価値もない。それぞれが個性を持ち、自己を認め、他を認め、多種多様な特徴がある選手が多く存在することが大切である。

さらに、指導者はサッカーに限らず、競技そのものの本質を理解していなければならない。サッカーの目的とは何かを理解していないといけない。攻撃ではゴールを目指し、展開の中では突破やボールポゼッションを目的とし、そして守備ではゴールを守り、ボールを奪いにいく。その方法として戦術が示され、相手に対して作戦が練られるのである。選手は味方、相手、ボールがさまざまな動きをする中で持っている技術、戦術から判断し、状況に合わせて駆使して行われる。指導者は、これらのサッカーの目的を理解した

上で、チームの方向性を導きだしトレーニングを計画しなければならない。指導者はサッカーや選手個人を分析、評価できる眼を持たなければならない。こうした眼を持ち、見たものや感覚を言葉にして指導できることこそが選手の可能性を広げることとなる。

指導者も学ばなければならない

指導者が選手や子どもたちに「何を」「どのように」伝えていくかという問題は、指導をするにおいて大きな課題である。指導者はときにこの難題にぶつかり、迷い、道を悩むときがでてくる。そのような場面では多くの指導者が、自身の指導方針、指導法、選手との関係など、指導におけるこれまでのさまざまな経験を振り返り、克服すべき点を洗い出していくであろう。もちろん自問自答の中で見出される答えにも価値のあるものは存在するに違いないが、それ以外に他競技や専門分野以外から、また指導者から新たな知見を得る体験、行動をとらなければならない。これにより指導者が見る目を養い、幅広い視野で多角的に分析し問題を解決することができる。そのためにはどうすればいいのか。

まずは、世界基準＝グローバルスタンダードに目を向けることである。これは言葉の通り、各競技のトップレベルのことを指す。トップレベルが目指すところはどこなのか。トップレベルではどのような指針の基で、どのようなトレーニングを行っているのか。指導者や選手はどのような行動をしているのか。トップであるということには必ず理由がある。その理由を突き詰め、理解する必要がある。指導レベルが異なるとしても、トップレベルのチームが成し遂げてきた成果、あるいはそのチームを取り巻く文化や歴史、チームが抱える問題も含め、我々が知り得る情報のすべてを把握することは、指導者にとって大きな意味を持つと考える。その情報収集の手段はいくらでも私たちの手の届くところに転がっている。書籍やインターネットには無数の情報があり、簡単に手に入れることができる。しかし、私は指導者自らがそのグラウンドに、試合会場に足を運び交流を図り、本物に触れ、肌でその全てを感じることに本当の価値があると考えている。指導者は自らが得た経験を伝えられなければならない。競技者としての経験は選手に大きな刺激になり得るが、それだけでは選手の想像性を育てることはできない。トップレベルを知り、最終的にそこに向かっていくために、今自分たちがどこにいるのかを把握しながら前進していかなければならない。また、現在の多く

の指導者が子どもたちの「できないことをできるようにすること」に主眼を置いているように思われる。それよりも指導者は選手の「できた」「表現した」ことに焦点をあてたい。指導者は、選手ひとりひとりの「自分ができる強み」を活かすことで、チームとしてのストロングポイントを作ることができる。自分に何ができるかを理解していること、自分ができることを表現できることで、選手自身が自信をもつことや、ひとつでもそのようなプレーを増やすということへの欲求につながり、自分を自覚して、自己確立ができるようになるのである。

次に、知を共有する仲間を増やす姿勢を持たなければならない。指導者は強い信念を持ち、忍耐力をもって指導に当たらなければならないため、孤独な存在と考える人も多いかもしれない。しかし、私は他の指導者と意見を交わし、互いの理念について語ることは非常に価値のあることと考える。他の考えに触れることで自身の考えが磨かれ、幅広い視野を持つことができるのではないだろうか。また、他を知るという意味では自身が指導する競技以外の種目に目を向けることも一つである。トレーニング方法や指導方法、種目は異なるとしても何か取り入れることはできないか、一度熟慮することも価値のあることと考える。他競技を知ること、自身のスポーツをより深く知るきっかけとなることもあるのではないだろうか。

このように挙げられたいくつかのことは、全て指導者の資質を磨くということにつながっていく。幅広い視野を持ち、見る目を養うことで、自身の見解に広がりを持つようになり、さまざまな選手に対応した多彩なアイデアを差し出すことが可能となる。指導者は選

手の個性と想像性を引き出すために、多くのことを学ばなければならない。元フランス代表監督であるロジェ・ルメール氏（2001 フットボールカンファレンス）は「学ぶことをやめたら教えることをやめなければならない」と呼びかけている。指導者にとっては、すべてが「学びの場」であり、そこで得られた多くのことを自身の言葉で、子どもたちに伝えてほしい。

6. 人間性を育む

育成年代の指導者は子どもたちにさまざまなことを教えなければならない、伝えなければならない。そのために指導者は多くのことに興味を持ち、知見を深める必要がある。サッカーはもちろんのこと他のスポーツにも目を向けると同時に、芸術や文化、歴史、宗教などあらゆることについて、理解を示すことが大切ではないだろうか。このような多くの興味が指導者の人間性を高めることにつながる。

スペイン代表監督であるピセンテ・デル・ボスケ氏（2011 フットボールカンファレンス）が「もしもサッカーのことしか知らなかったら道に迷う」と示しているように、指導者がサッカー以外の事から多くのことを吸収することにより人間性を豊かに、そして自分の可能性を広げることとなる。まだまだ日本サッカー界の育成は発展途上である。私も含め、多くの指導者やスポーツに関わる人の手によって子どもたちを支えること、育てることをしていくべきではないだろうか。世界で活躍する人材がひとりでも多く増え、子どもたちの限りない未来が光に満ちたものになるように、日本独自の育成システムを確立したい。